

# 中世文学資料解題②

星 瑞 穂

## はじめに

本稿は『北の丸』五二号（令和二年）掲載の「中世文学資料解題①」に続くものである。当館所蔵の資料のうち、鎌倉時代～室町時代にかけて成立した文学作品（中世文学）および後世に成立したその注釈書類の書誌解題である。広く一般の利用に供するため、作品解説を加えて掲載する。

今回は『改訂 内閣文庫国書分類目録』の「国文」の項目に挙げられている資料から、該当の資料を抽出して調査した。旧蔵者は紅葉山文庫・昌平坂学問所・和学講談所など多岐に及ぶが、近世初期に出版された注釈書も多く含み、中世文学の享受の実態をうかがうことができる。

なお、挿絵を伴う資料については、すでに『北の丸』四五号（平成二五年）～五〇号（平成三〇年）に「当館所蔵の「絵入り本」解題①～⑥」として紹介しているので参照されたい。

【四四】平家物語 慶長年間刊 一一冊

昌平坂学問所旧蔵 一特二二四・〇〇〇四

本資料は重記物語『平家物語』の慶長古活字版である。中院通勝の手に

よる校合が施されていることから「中院本」と呼ばれるもの。袋綴。一一二巻一二冊。

川瀬一馬氏の『増補古活字版之研究』（昭和四二年）に言及がある。実際、本資料の第一冊目の遊紙には川瀬氏の筆跡と思われる字で「平家物語」と鉛筆書きされており、かつその遊紙の袋の中に附箋（一三・〇糶×九・五糶）が貼付されている。附箋には万年筆で以下の通り。

「中院本（古活版）平家物語／東京ニテ一見セルモノ本書トトモニ三本也／一・帝国図書館本／一・史料本／昭和五夏／川瀬一馬記／ナホ本書ヲ臨写セシモノト覚ユル本玉井幸助ノ氏ノ書架ニアリ。／（以上）／（印）」

本文は八坂系一類本に分類される。三条西家本と下村本と近似しており、三条西家本の本文を下村本で校合したものと想定されている（山下宏明編『平家物語八坂系諸本の総合的研究』（平成七年度科学研究費補助金（総合研究(A)）研究成果報告書、平成八年）。

本資料は水浅葱色の表紙に、雲母刷で千鳥や梅枝など光悦風の裝飾が施されているが、文様は冊次毎に異なっている上、汚損のため雲母が剥けているものも多い。それぞれの文様は以下の通りである。

①汚損のため不明、②汚損のため不明、③汚損のため不明、④汚損のため不明、⑤波、裏表紙は舞鶴、⑥梅枝、⑦老松、裏表紙は舞鶴、⑧

梅枝、⑨汚損のため不明、⑩舞鶴、裏表紙は老松、⑪槍梅、⑫汚損のため不明

これらは原装と考えられる。光悦風の表紙のためか、第二二冊目の本文末尾には朱書で「光悦本」と書かれているが、これは後世に書き加えられたものだろう。

各冊とも表紙の右肩に「昌平坂学問所」墨印が見える。第一丁目には「大学蔵書」「内閣文庫」「日本政府図書」「浅草文庫」と捺され、本文末尾には「昌平坂学問所」(墨印)「内閣文庫」「文政乙酉」の印がある。これにより、本資料は文政八年(一八二五)に昌平坂学問所に収められたものと推定される。

【書誌】

外題・「平家物語 第一(十二)」左肩打付墨書

内題・「平家物語」

表紙・水浅葱色地雲母刷表紙(二六・八糎×一九・八糎)

遊紙・①「平家物語」と鉛筆書、袋の中に川瀬一馬筆の附箋(二三・

〇糎×九・五糎)貼付

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①六一丁、②八二丁、③二二〇丁、④九一丁、⑤七八丁、

⑥六一丁、⑦八二丁、⑧六二丁、⑨二一六丁、⑩八五丁、⑪九六丁、

⑫九〇丁

印記・表紙「昌平坂学問所」(墨印)、第一丁目「大学蔵書」「内閣文庫」

「日本政府図書」「浅草文庫」、本文末尾「昌平坂学問所」(墨印)「内

閣文庫」「浅草文庫」「文政乙酉」

【刊年・刊行者】

⑫九〇オの刊記は以下の通り。

「右此平家物語は中院前中納言以ノ諸家正本校合之給者也」

刊記の「中院前中納言」は中院通勝のことで、「校合」とは三条西家本と下村本を用いた作業のことを指していると思われる。通勝すなわち刊行者とは言い難いが、古活字版である点、また原装の表紙から見えて通勝周辺の関係者のみに配布されたものであると想定できる。

東京大学総合図書館所蔵の写本に「慶長十年」の奥書がある点から、本資料は慶長一〇年以前の刊行であることが推定される(山下宏明編『平家物語八坂系諸本の総合的研究』(平成七年度科学研究費補助金〔総合研究(A)〕研究成果報告書、平成八年)。

【四五】平家物語 刊年不明 一二冊

和学講談所旧蔵 請求番号特二二三・〇〇〇二

本資料は軍記物語『平家物語』の版本で、寛永年間に刊行された古活字版。前掲資料と同様「中院本」と称され、同じ本文を持つが、刊行時期が異なるため版面などに違いがある。袋綴。一二冊。

中院本は、慶長版(每半葉一〇行・一八字)、慶長元和版(每半葉一一行・二〇字)、元和寛永版(每半葉二二行・二二字)、寛永版(每半葉二二行・二八字)、刊年不明版(每半葉一一行・二七字)の五種類の版が知られ、それぞれ刊記の有無や修正に伴う植字の違いなどから、下位区分される。本資料は每半葉一一行・二〇字の慶長元和版に相当すると思われる。

表紙は無地の香色で、左肩に浅葱色料紙に四周双边の枠を刷った題簽が貼られているが、外題はすべて墨書で、表紙も題簽も後補と思われる（第三冊目のみ題簽欠）。

本資料はすべての冊の第一丁目オモテに「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」の印が捺されており、和学講談所の旧蔵だったことがわかる。

①一才に円型の染みあり。水損か。

【書誌】

外題・①⑫「平家物語 一（十二）」左肩浅葱色地四周双边刷題簽に墨書（③のみ欠）

内題・「平家物語」

表紙・香色表紙（二六・〇糎×一九・〇糎）

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一一行

字面高さ・二二・二糎

匡郭・なし

墨付丁数・①七四丁、②六二丁、③九八丁、④六八丁、⑤六二丁、⑥

四八丁、⑦六六丁、⑧五二丁、⑨九二丁、⑩六七丁、⑪八〇丁、⑫七

一丁

印記・各冊一才「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」

【刊年・刊行者】

本資料は刊記を持たず刊年・刊行者ともに不明。

【四六】平家物語 写年不明 四八冊

朽木綱泰旧蔵 「請求番号二〇三・〇一四九」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、「延慶本」系統の本文を持つもの。特に本資料は「朽木本」の通称で知られる。六卷四八冊。

「延慶本」は延慶年間の本奥書を持つ写本で、応永二六年（二七〇）（一四一九）に書写されて現在は大東急記念文庫の所蔵となっているものである（重要文化財）。本資料はこの応永書写本からの転写本で、虫損の跡などもそのまま再現している。現在「延慶本」系統の本文を持つ写本はいずれもこの応永書写本の転写あるいはそのさらに転写本に相当する。

延慶本は語り本系統に分類される本文のひとつで、特に鎌倉時代の古態を残しているときれ、研究上、重要視されてきた伝本のひとつである。様々な資料や説話を含み、記事量も豊富である。ただし、この延慶本の性格をどのように位置付けるかについては、未だ研究者の議論の分かれるところである（水原一『延慶本平家物語論考』加藤中道館、一九七九年・櫻井陽子「延慶本平家物語（応永書写本）本文再考」『国文』九五号、二〇〇一年ほか）。冒頭に桓武平氏・坂東平氏・清和源氏の系図を置き、各巻毎に目錄を置く。

本資料は金茶色地に唐草文様を型押しした表紙を持つ。題簽は同色のものに墨書。

第一冊目の見返しには「角倉本」と墨書されているが、「角倉本」は「延慶本」の別名である。

また①③一才には「朽木文庫」の印がある。これは蔵書家として知られた幕臣の朽木綱泰の蔵書印である。本資料の通称「朽木本」はこの印によるものである。

なお各冊の冒頭には「秘閣図書之章」「日本政府図書」「内閣文庫」の印があり、紅葉山文庫旧蔵として扱われていたことがわかる。

【書誌】

外題・①「平家物語 巻」左肩打付墨書、②～④⑧「平家物語 式」(四十八)「左肩金茶色題簽(一八・二糎×二・二糎)に墨書

内題・「平家物語」

表紙・金茶色唐草文様型押表紙(二六・〇糎×一九・〇糎)

見返し・①右肩に「角倉本」と墨書、左下に「日本政府図書」の蔵書

票貼付

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①二六丁、②二五丁、③二二丁、④三六丁、⑤三〇丁、⑥三〇丁、⑦二八丁、⑧二八丁、⑨二五丁、⑩二六丁、⑪二六丁、⑫二八丁、⑬三二丁、⑭二九丁、⑮二四丁、⑯二九丁、⑰二九丁、⑱二五丁、⑲三二丁、⑳二七丁、㉑二二丁、㉒三二丁、㉓二四丁、㉔二七丁、㉕四二丁、㉖二二丁、㉗二〇丁、㉘一九丁、㉙一四丁、㉚二二丁、㉛二二丁、㉜二四丁、㉝二四丁、㉞二〇丁、㉟二〇丁、㊱一八丁、㊲二四丁、㊳二〇丁、㊴三二丁、㊵二二丁、㊶二〇丁、㊷二〇丁、㊸二〇丁、㊹二二丁、㊺三二丁

印記・①③一オ「朽木文庫」、各冊一オ「秘閣図書之章」「日本政府図書」「内閣文庫」、各冊本文末尾「日本政府図書」「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料には、⑰二九ウ、⑱三オ、⑳二二オ、㉑二二ウにそれぞれ応永写本の奥書があり、㉒四二ウ、㉓二四ウ、㉔二二ウに延慶二年三年の元奥書がある。

【四七】平家物語補闕劔巻 写年不明 二冊

和学講談所旧蔵 [請求番号二〇三・〇一六五]

本資料は軍記物語『平家物語』に関連する写本のひとつで、目録題は「平家物語補闕劔巻」とあるが、実際は「平家物語補闕鏡巻」との二巻二冊組みである。袋綴。

漢字片仮名交じりの本文を持ち、第一冊目の「平家物語補闕劔巻」は主に宝劔の来歴が語られる。『平家物語』や『太平記』の「劔巻」が主に源氏重代の「髭切」「膝丸」の物語であるのに対し、本資料は素戔嗚尊の八岐大蛇退治から壇ノ浦の戦いまでを語る。また第二冊目の「平家物語補闕鏡巻」も八咫鏡の来歴が中心となる。元奥書には本書は「旧本平家物語」に「闕如」した鏡と劔の「本縁」を補うために様々な資料を探し集めて編まれたものだとある。本文はおよそ『日本書紀』『古事記』『先代旧事本紀』などの引用が多く、鏡と劔をめぐる説話を当時の伝存資料から集成する目的があったと思われる(黒田彰「平家物語補闕鏡巻、劔巻をめぐる――軍記物語と日本紀」『国文学・解釈と鑑賞』六四・三号、一九九九年)。

表紙は香色の布目紙。第一冊目は左肩に無地の題簽で「平家物語劔巻補闕」と墨書してあるが、第二冊目は題簽が脱落した跡が見られ、左肩に朱で「平家物語鏡巻補闕」と打付書されている。

また本資料は「劔巻」のほうに奥書があるため、「鏡巻」が第一冊目であ

るほうがふさわしい。

黒田彰氏「内閣文庫蔵 平家物語補闕鏡巻、劍巻」（愛知県立大学『説林』四七号、一九九九年）に解説・影印・翻刻が載る。これによれば諸本として、本資料のほか、大阪府立図書館蔵本・国会図書館蔵本・尊経閣文庫蔵本が挙げられており、いずれも近世期の書写である。

なお本資料は二冊ともに一才に「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」の印が捺され、本文の末尾に「日本政府図書」の印が捺されている。これらから和学講談所の旧蔵であることがわかる。

#### 【書誌】

外題・①「平家物語劔巻補闕」左肩無地料紙題簽に墨書（一七・五糎

×三・五糎）、②「平家物語鏡巻補闕」左肩打付朱書

内題・①「平家物語補闕劔巻」、②「平家物語補闕鏡巻」

表紙・香色布目型押表紙（二八・〇糎×一九・五糎）

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①二三丁、②一〇丁

印記・①②一才「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」、

本文末尾「日本政府図書」

#### 【写年・書写者】

本資料には第一冊目の末尾に元奥書がある。これによれば本書はそもそも至徳元年（二三八四）に『平家物語』に欠けている鏡と劔の「本縁」を補うために様々な資料を探し集めて編まれたものだという。こ

の至徳元年の元奥書のほか、文正二（一四六八）年、寛永三（一六二六）年、宝永二（一七〇五）年の計四種類の元奥書が見られる。至徳元年の奥書が作者によるもので、以降は書写のたびに追加されたもの。作者についてははっきりしないが、寛永三年の奥書はこれを「葉室家ノ庶流者」と推定する。なお一番新しい年記は「宝永丙戌歳孟春人日今出河若卯暇（花押）」だが、これも書写者の手によるものとは考えにくく、したがって本資料は宝永二年以降の書写と推定される。

#### 【四八】平家物語抄 刊年不明 一一冊

大澤基季旧蔵 「請求番号二〇三・〇一五九」

本資料は軍記物語『平家物語』の注釈書で、江戸時代に刊行されたもの。

刊行時は二巻二四冊だったが、本資料の場合、巻三を欠き、一巻毎に合冊して全一一冊。袋綴。

刊本は当館のほか、東京国立博物館などに所蔵されており、伝存資料は少なくない。写本では宮内庁書陵部に二巻六冊のものが所蔵されていることが知られている。

注釈は『漢書』『史記』など漢籍からの引用が多いが、同時に『梁塵秘抄』など当時あまり流布していなかったと考えられる和書からも引用されている点特徴的である。長文の批評が多く『平家物語評判秘伝抄』との関連が指摘されている。（後藤丹治『平家物語の註釈及び研究』『国語と国文学』三・三〇号、一九二六年・小松茂人『中世軍記の研究』桜楓社、一九六二年・市古貞次編『諸説一覽平家物語』明治書院、一九七〇年）

本資料は状態が悪く、⑨⑩⑪の裏表紙は近年の補修によるもの。①一オ〜四六ウ、⑨四七オ〜九〇ウまでは近世期の補写である。四周双辺の枠を持つ題簽も後補（①②③④⑥⑧⑨⑩⑪）と思われ、元題簽は⑤⑦の唐草文様を雲母刷したものを（⑤⑦）と推定される。

四周単辺の匡郭の上部、高さ八・〇糎の部分に頭書で、本文部分の高さは一六・〇糎。補写の部分に匡郭はないが、字高は版本に合わせてある。

蔵書印は各冊の第一丁目に「書籍館印」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」「大澤侍従兼下野守蔵書」とある。幕臣で従五位下侍従下野守に上った大澤基季が旧蔵者であることがわかる。但し、この印は二重に捺されていると見え、かなり不鮮明である。

【書誌】

外題・①②③④⑥⑧⑨⑩⑪「平家物語抄 一（〜十二）※三欠」左肩四周双辺刷題簽（一六・五糎×三・〇）に墨書、⑤「平家物語抄 六

之上下」左肩唐草文様雲母引料紙題簽（一八・八糎×四・三）に墨書、

⑦「平家物語抄 八」左肩唐草文様雲母引料紙題簽（一八・八糎×四・

三（※一部剥落）に墨書（※「八」は後補）

内題・「平家物語抄」

表紙・青鈍色表紙（二六・〇糎×一九・〇糎）

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・一六・〇糎（本文）、八・〇糎（頭書）

匡郭・四周単辺（二四・〇糎×一六・〇糎）

墨付丁数・①八六丁（※一〜四六補写）、②九二丁、③六七丁、④八一

丁、⑤七二丁、⑥八八丁、⑦六八丁、⑧一〇三丁、⑨九〇丁（※四七

〜九〇補写）、⑩九四丁、⑪九五丁

印記・各冊一オ「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」

「日本政府図書」「大澤侍従兼下野守蔵書」

【刊年・刊行者（写年・書写者）】

本資料には刊記がないため、刊年・刊行者ともに不明である。また補写がどこされた時期についてもはっきりしない。補写部分に「大澤侍従兼下野守蔵書」の印があることから、大澤基季が侍従兼下野守となった宝永五年よりは遡ることがわかる。

【四九】平家物語考證 写年不明 一二冊

大学校・大学旧蔵 「請求番号二〇三・〇一六三二

本資料は軍記物語『平家物語』の注釈書で、江戸時代前期に成立したと考えられているもの。袋綴。一二巻一二冊。

漢文の注記は野宮定基の手によるもので、漢字片仮名まじり文の注記は野宮定俊が後から補ったものである。野宮定基（初名を中院親茂）は中院通茂の次男で権中納言正三位まで上り、和歌や有職故実に関する著作を多く残している。野宮定俊は正親町公通の次男で、定基の養子となった人物である（大川茂雄・南茂樹編『国学者伝記集成』大日本図書、明治三十七年・國學院大學日本文化研究所編『和学者総覧』汲古書院、平成二年）。定基は正徳元年に没していることから、本書の成立は正徳元年以前と推定される。序文によれば、本書は『平家物語』の史実性を考証することを目的としており、実際『吉記』『玉葉』など中世の史料を多く引用している。なお本書は『平家物語』の作者については葉室時長説を挙げて検証している。

本資料の場合、『平家物語』本文の字高は二〇・五糎程度だが、定基注は一八・五糎、定俊補注は一七・五糎で書き分けられている。表紙は縹色横刷毛目。左肩に無地の題簽で外題が墨書されている。蔵書印は「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」が各冊一才にある。これによって大学校・大学の旧蔵であることがわかるが、それ以前の旧蔵者についてははっきりしない。

【書誌】

外題・「平家物語考證 一（一十二）」左肩無地料紙題簽（二七・〇糎×三・七糎）に墨書

内題・「平家物語考證」

表紙・縹色横刷毛目表紙（二七・八糎×二〇・五糎）

料紙・斐楮混ぜ漉き

行数・每半葉一行

字面高さ・二〇・五糎（本文）、一八・五糎（注）、一七・五糎（補注）

匡郭・なし

墨付丁数・①九〇丁、②六二丁、③五九丁、④五六丁、⑤六七丁、⑥四二丁、⑦二五丁、⑧八一丁、⑨三〇丁、⑩三六丁、⑪三八丁、⑫四〇丁

印記・「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たず、写年・書写者に関しては不明である。

【五〇】平家物語考證 写年不明 五冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇三・〇一六六」

本資料は前掲資料同様、軍記物語『平家物語』の注釈書『平家物語考證』の写本である。袋綴。十二巻五冊。

本資料は前掲資料と異なり、野宮定俊の補注を欠き、漢文の野宮定基の注のみを収める。また全五冊に十二巻が収められている。

各冊とも表紙と本文末尾に「昌平坂学問所」の墨印が捺されている。また本文末尾には「昌平坂学問所」印と共に「元治甲子」の朱印があることから、元治元年（一八六四）に昌平坂学問所に新収されたことがわかる。

【書誌】

外題・「平家物語考證 一（一五）」左肩打付墨書

内題・「平家物語考證」

表紙・浅葱色布目型押表紙（二七・二糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・〇糎（本文）、二〇・〇糎（注）

匡郭・なし  
墨付丁数・①六八丁、②七六丁、③六一丁、④七九丁、⑤六七丁  
印記・各冊表紙「昌平坂学問所」（墨印）、各冊一才「日本政府図書」「浅草文庫」、各冊本文末尾「昌平坂学問所」「元治甲子」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たず、写年・書写者に関しては不明である。

【五一】平家物語考證 写年不明 九冊

旧蔵者不明 「請求番号二〇三・〇一六四」

本資料は前掲資料と同じ、軍記物語『平家物語』の注釈書『平家物語考證』の写本である。但し、巻一・巻九・巻二〇を欠くため、全九冊。袋綴。

本資料は橙色の布目紙の表紙に、外題が左肩に打付書されている。

巻一・巻九・巻一〇を欠くため、①表紙には朱で「二欵」(六・〇糎×一・五糎)と書かれた附箋が右下に貼付されている。同様に⑧表紙には「九・十欵」(同)の附箋が貼られている。

本資料は『平家物語』の本文・注(漢文・補注(漢字片仮名交じり))の三つの文章で構成されており、それぞれ字高は二〇・五糎、一九・〇糎、一七・五糎。ただし、第八冊目のみ別筆と見られ、行数は他の冊と同じだが、本文の字高のみ二一・五糎でやや高い。また第八冊目のみ裏表紙が砥粉色の布目紙になっている。

蔵書印については、各冊一才に「日本政府図書」の印があるのみで、旧蔵者にはつきりしない。

【書誌】

外題・「平家物語考證 二(十二止)」(二・九・十欠) 左肩打付墨書  
内題・「平家物語考證」

表紙・橙色布目型押表紙(二六・二糎×一八・二糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉一一行

字面高さ・二〇・五糎(本文)、一九・〇糎(注)、一七・五糎(補注)

(※⑧のみ本文字高二一・五糎)

匡郭・なし

墨付丁数・①六〇丁、②五九丁、③五六丁、④六七丁、⑤四三丁、⑥二四丁、⑦八一丁、⑧三八丁、⑨四〇丁

印記・一才「日本政府図書」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たず、写年・書写者に関しては不明である。

【五二】平家物語評判秘伝抄 刊年不明 二四冊

元老院旧蔵 「請求番号二〇四・〇〇〇五」

本資料は軍記物語『平家物語』の評論書で、慶安三年(一六五〇)初版。作者は由井正雪など諸説挙げられるが、未詳。一二巻二四冊。袋綴。

本書は批評や注釈を中心にした「評」と、底本には未収録の説話を述べる「伝」によって構成される。特にこの「伝」は、出典未詳のものが多く、独自の説話で構成されている。本書の誤りを指摘した『平家物語評判瑕類』(宝永七年序)は、この「伝」についても偽作説を唱えている。

本資料の場合、本文の高さは二一・二糎。評・伝はそこから一段下がって二〇・〇糎程度である。

本資料は各冊一才に「元老院図書記」の印が捺されており、元老院の旧蔵であったことがわかるが、それ以前の所蔵者や来歴についてははつきりしない。第三冊目に明治一三年の年記を持つ『杜騙新書訳解』(大倉孫兵衛版)の広告(六・七糎×八・三糎)が挟まっており、元老院が明治八年から明治一三年まで存続していたことを考えると、本資料は明治一三年頃に購入したものか。

全体的に状態は良くない。⑥⑦⑨⑫⑭⑱⑳㉑㉒は題簽が脱落しており、①は表紙の汚損が激しい。全体的に虫損も多い。

表紙は紺色に卍字繫を艶出したもの。第一冊目の外題は四周双边刷題簽



で左肩に「平家／物語／評判秘伝抄／卷第／「二之上」と出しているが、欠けている部分も多い。なお「平家／物語」は角書で、巻数も双行である。

⑱の裏見返しには、印刷の際に生じた反古が使われている。

【書誌】

外題・「平家／物語／評判秘伝抄／卷第／「二之上」左肩四周双辺刷  
題簽（一九・〇糶×四・〇糶）

内題・「平家物語評判秘伝抄」

表紙・紺色中字繫艶出表紙（二六・五糶×一八・五糶）

料紙・楮紙

行数・每半葉一一行

字面高さ・二一・二糶（本文）、二〇・〇糶（評・伝）

匡郭・四周単辺（二一・二糶×一六・〇糶）

墨付丁数・①六四丁、②五八丁、③三八丁、④三三丁、⑤三四丁、⑥三四丁、⑦三八丁、⑧三四丁、⑨三七丁、⑩三七丁、⑪四二丁、⑫五〇丁、⑬四二丁、⑭四四丁、⑮四二丁、⑯四五丁、⑰四九丁、⑱五八丁、⑲二九丁、⑳三四丁、㉑五四丁、㉒四二丁、㉓三七丁、㉔三三丁  
印記・一オ「元老院図書記」

【刊年・刊行者】

⑳三三ウに以下の通り、刊記あり。

「江戸 中野左太郎開板」

中野左太郎は江戸芝神明前に店を構えていた版元で、京の中野五郎左衛門の系列である（『江戸鹿乃子』）。

刊年については記載がなく、いわゆる刊年不明版。刊記は入木である。

【五三】平家物語評判秘伝抄 刊年不明 二冊

旧蔵者不明 「請求番号特〇二八・〇〇〇三三

本資料は前掲資料と同じ、軍記物語『平家物語』の評論書『平家物語評判秘伝抄』の刊本である。巻二と巻二二が上下合冊されているため、一二二巻で全二二冊。袋綴。

金茶色地に薄縹色で唐草・七宝尽くしの文様を織った二つの帙に収められている。右肩に「月」と墨書あり。それぞれ一〇冊、一二冊ずつ。

表紙は縹色表紙で、左肩に四周双辺刷題簽で「平家物語評判 卷之二」と出しているが、外題の巻数は最初から順に機械的に番号を振っている（巻之一く巻二二）ため、中身と巻数に齟齬がある。正しい巻数はそれぞれの内題・版心・小口の墨書でわかる。また、題簽は⑤⑫⑰のみ「平家物かたり評判 卷之六（卷十三・卷十八）」と、「語」の字を「かたり」と仮名に開いているが、題簽そのものの大きさや字は他の題簽と共通するので、同時に印刷されたものであり後補ではないことがわかる。ただし、全体的に大幅な修復が入っていると思われる、表紙・帙ともに刊行時の原装とは言い難い。紅葉山文庫旧蔵書に多く見られる表紙である。

表紙の右肩に附箋「月」（二・三糶×一・二糶、朱書）あり。

第一冊目の見返しに「日本政府図書」の蔵書票の貼付あり。また各冊一オおよび本文末尾にも「日本政府図書」の印がある。ただし、他に印記は見当たらず（改装のためか）、旧蔵者ははっきりしない。

【書誌】

外題・①②④⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑「平家物語評判 卷之一（卷之二・卷之五・卷之七・卷之八・卷之九・卷之十・卷十一・卷十

二・卷十四・卷十五・卷十六・卷十七・卷十九・卷二十・卷廿一・卷廿二」左肩四周双边刷題簽（一九・三糎×三・八糎）、③⑳「平家物語評判 卷之三／四（卷廿三／廿四 止）」左肩四周双边刷題簽（一九・三糎×三・八糎）、⑤⑫⑰「平家物かたり評判 卷之六（卷十三・卷十八）」

内題・「平家物語評判秘伝抄」

表紙・縹色表紙（二六・五糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二一・二糎（本文）、二〇・〇糎（評・伝）

匡郭・四周单边（二一・二糎×一六・〇糎）

墨付丁数・①六三丁、②五八丁、③七二丁、④三四丁、⑤三四丁、⑥三四丁、⑦三八丁、⑧三七丁、⑨三七丁、⑩四一丁、⑪五〇丁、⑫四二丁、⑬四四丁、⑭四二丁、⑮四四丁、⑯四九丁、⑰五八丁、⑱二九丁、⑲三四丁、⑳五四丁、㉑四一丁、㉒六六丁

印記・①見返し「日本政府図書」（蔵書票、各冊一才・各冊本文末尾

「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本資料に刊年の記載はない。㉒六六ウには「田中庄兵衛／梅村弥右衛門 版」とある。

田中庄兵衛・梅村弥右衛門ともに京寺町の版元である。前掲資料（請求番号二〇四・〇〇〇五）とは刊記が異なっている。

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇四・〇〇〇六」

本資料は前掲資料と同じ軍記物語『平家物語』の評論書『平家物語評判秘伝抄』の刊本。一二巻二四冊。袋綴。

本資料は前掲資料（請求番号特〇二八・〇〇〇三）と同版と考えられるが、合冊などの手は加わっていないため、一二巻をそれぞれ上下にわけて二四冊になっている。

左肩に四周双边の刷題簽で「平家物語評判 卷之一（〜卷廿四）」とあるが、⑥⑬⑱⑳のみ「平家物かたり評判 卷之六（卷十三・十八・廿四）」という形で「語」の部分が「かたり」と仮名に開いてある。題簽は前掲資料（請求番号特〇二八・〇〇〇三）に酷似するが、表紙の状態が悪く原装かどうかはわからない。

本資料は、表紙および末尾に「昌平坂学問所」の墨印があり、昌平坂学問所の旧蔵であることがわかる。また本文末尾には「文久甲子」の朱印があることから、文久四年に昌平坂学問所に新収されたことがわかる。

【書誌】

外題・①②③④⑤⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒「平家物語評判 卷之一（卷之二・卷之三・卷之四・卷之五・卷之七・卷之八・卷之九・卷之十・卷十一・卷十二・卷十四・卷十五・卷十六・卷十七・卷十九・卷二十・卷廿一・卷廿二・卷廿三）、⑥⑬⑱⑳「平家物かたり評判 卷之六（卷十三・十八・廿四）」左肩四周双边刷題簽（一九・三糎×三・八糎）、

内題・「平家物語評判秘伝抄」  
表紙・紺色表紙（二五・〇糎×一八・〇糎）  
料紙・楮紙

【五四】平家物語評判秘伝抄 刊年不明 二四冊

行数・毎半葉二一行

字面高さ・二一・〇糎（本文）、二〇・〇糎（評・伝）

匡郭・四周单边（二一・〇糎×一六・〇糎）

墨付丁数・①六三丁、②五八丁、③三八丁、④三三丁、⑤三四丁、⑥三四丁、⑦三四丁、⑧三八丁、⑨三七丁、⑩三七丁、⑪四一丁、⑫五〇丁、⑬四二丁、⑭四四丁、⑮四二丁、⑯四五丁、⑰四九丁、⑱五八丁、⑲二九丁、⑳三四丁、㉑五四丁、㉒四一丁、㉓三七丁、㉔三三丁  
印記・各冊一才「日本政府図書」「浅草文庫」、各冊表紙「昌平坂学問所」（墨書）、各冊末尾「昌平坂学問所」（墨書）「文久甲子」

【刊年・刊行者】

本資料に刊年の記載はない。㉔三三ウには前掲資料（請求番号特〇二八・〇〇〇三）と同じ「田中庄兵衛／梅村弥右衛門 版」とある。

【五五】平家物語評判秘伝抄

刊年不明 二四冊

旧蔵者不明 「請求番号一六七・〇〇四二」

本資料は軍記物語『平家物語』の評論書『平家物語評判秘伝抄』の刊本で、前掲資料（請求番号二〇四・〇〇〇六・特〇二八・〇〇〇三）の同版。袋綴。二四冊。

匡郭の欠けなどから判断するに、前掲資料（請求番号二〇四・〇〇〇六・特〇二八・〇〇〇三）と同版と判断されるが、紙の大きさが異なっており、本資料のほうが大型（二八・二糎×一九・八糎）である。また外題の題簽も前掲資料と同版と思われるが、左肩に貼付されている前掲資料と異なり中央に貼られている。

見返しに「日本政府図書」の蔵書票が貼付されているほか、蔵書印は見当たらず、旧蔵者のはつきりしない。保存状態はわずかな虫損があるのみで、極めて良好。

【書誌】

外題・①②③④⑤⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒  
卷之一（卷之二・卷之三・卷之四・卷之五・卷之七・卷之八・卷之九・卷之十・卷之十一・卷之十二・卷之十四・卷之十五・卷之十六・卷之十七・卷之十九・卷之二十・卷之二十一・卷之二十二・卷之二十三）  
⑥⑬⑱⑲「平家物かたり評判 卷之六（卷十三・十八・廿四止）」中央四周双边刷題簽（一九・〇糎×四・〇糎）

内題・「平家物語評判秘伝抄」

表紙・紺色表紙（二八・二糎×一九・八糎）

見返し・①「日本政府図書」（蔵書票）貼付

遊紙・各冊一丁

料紙・楮紙

行数・毎半葉二一行

字面高さ・二一・〇糎（本文）、二〇・〇糎（評・伝）

匡郭・四周单边（二一・〇糎×一六・〇糎）

墨付丁数・①六三丁、②五八丁、③三八丁、④三三丁、⑤三四丁、⑥三四丁、⑦三四丁、⑧三八丁、⑨三七丁、⑩三七丁、⑪四一丁、⑫五〇丁、⑬四二丁、⑭四四丁、⑮四二丁、⑯四五丁、⑰四九丁、⑱五八丁、⑲二九丁、⑳三四丁、㉑五四丁、㉒四一丁、㉓三七丁、㉔三三丁  
印記・①見返しに「日本政府図書」（蔵書票）貼付

【刊年・刊行者】

本資料に刊年の記載はない。㉔三三ウには前掲資料（請求番号特〇

二八・〇〇〇三)と同じ「田中庄兵衛／梅村弥右衛門 版」とある。

【五六】平家物語評判秘伝抄

刊年不明 二四冊

内務省旧蔵 「請求番号：一六七・〇〇四二」

本資料は軍記物語『平家物語』の評論書『平家物語評判秘伝抄』の刊本で、前掲資料(請求番号二〇四・〇〇〇六・特〇二八・〇〇〇三・一六七・〇〇四二)の同版。袋綴。二四冊。  
全体的に縹色の表紙だが、第一冊目の表紙のみ紺色。題簽も脱落した冊が多い(後述)。

①見返しに一・〇糶×〇・八糶程度の墨印が複数捺されている。判読できらるものでは「午」「〇万合」「岡新」「安藤」「〇次」など。またこれらの印の下部には「千百七十四 全部式拾四冊」と墨書されている。おそらくこれらは貸本屋で使用されていた際のもので、多くの貸本屋を転売されてきて最終的に内務省に収められたことが想像される。

蔵書印はこれらの墨印のほか、各冊一才に「大日本帝国図書記」「太政官文庫」「日本政府図書」、本文末尾に「日本政府図書」「大日本帝国図書記」の朱印が見られる。

【書誌】

外題・①③⑨⑬⑲⑳㉑㉒㉓㉔題簽欠、②④⑤⑦⑧⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑「平家物語評判 卷之二(卷之四・卷之五・卷之七・卷之八・卷之十・卷之十一・卷之十二・卷之十四・卷之十五・卷之十六・卷之十七・卷之十八・卷之十九・卷之二十・卷之廿二)、⑥「平家物かたり評判 卷之六」左肩四周双边刷題簽(一九・〇糶×四・〇糶)

内題・「平家物語評判秘伝抄」

表紙・①紺色表紙(二五・五糶×一八・二糶)、②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑縹色表紙(二五・五糶×一八・二糶)

見返し・①「午」「〇万合」「岡新」「安藤」「〇次」(約一・〇糶×〇・八糶、陽刻墨印)、「千百七十四 全部式拾四冊」と墨書

料紙・楮紙  
行数・每半葉一一行

字面高さ・二一・〇糶(本文)、二〇・〇糶(評・伝)

匡郭・四周单边(二一・〇糶×一六・〇糶)

墨付丁数・①六三丁、②五八丁、③三八丁、④三三丁、⑤三四丁、⑥三四丁、⑦三四丁、⑧三八丁、⑨三七丁、⑩三七丁、⑪四一丁、⑫五〇丁、⑬四二丁、⑭四四丁、⑮四二丁、⑯四五丁、⑰四九丁、⑱五八丁、⑲二九丁、⑳三四丁、㉑五四丁、㉒四一丁、㉓三七丁、㉔三三丁  
印記・各冊一才「大日本帝国図書記」「太政官文庫」「日本政府図書」、各冊末尾「日本政府図書」「大日本帝国図書記」

【刊年・刊行者】

本資料に刊年の記載はない。⑲⑳㉑には前掲資料(請求番号一六七・〇〇四二)と同じ「田中庄兵衛／梅村弥右衛門 版」とある。

【五七】源平闘諍録 写年不明 五冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇九三・〇〇〇三二」

本資料は軍記物語『平家物語』の異本のひとつ『源平闘諍録』の写本で、室町時代書写と考えられている伝存最古のもの。卷一・卷五・卷八のみが

伝わっており全五冊。綴葉装。

『源平闘諍録』は当館にのみ伝存する貴重な写本として知られる。『平家物語』の異本のうち、延慶本や『源平盛衰記』に共通する本文を持つため読み本系に分類され、一部に古態を残す。特に千葉氏を中心として坂東平氏の記述が多いことから、千葉氏の伝承を基に編集されている可能性が指摘されている(野口実「千葉氏の嫡宗権と妙見信仰」『千葉県史研究』六号、一九九八)。全一〇巻あるいは全一二巻のうち、巻一・巻五・巻八のみ三巻が伝存すると考えられているが、かなり早い段階で本資料は三巻のみになつていたのである。そのため、成立当初から三巻しかなく、『平家物語』を補足する形で必要な部分だけ編集されたという説もある(早川厚一『源平闘諍録』の巻立てと構成『名古屋学院大学論集 人文自然科学編』一九一号、一九八二)(同「源平闘諍録考」『中世文学』三一号、一九八六)。

本資料は紺色表紙で、比較的縦長(二六・五糎×一六・五糎)。表紙はおそらく後補である。本文に匡郭は印刷されていないものの、四周単辺の枠(二二・八糎×一五・〇糎)および界線(每半葉一〇行)が空押しされている。各行頭には針穴の跡が見られ、書写の際に針見当を用いたことがわかる。

記述は真名文で簡略な記述が特徴。朱書で点が施されているが、巻によってばらつきがあり、点を加えられた時期についてははっきりしない。

③⑤は別筆に見える。題簽についてはこれも後補と思われるが③のみ別筆に見える。

印記については、①見返しに「日本政府図書」の蔵書票が貼付されているほか、②一才に「秘閣図書之章」の印が捺されている点が特記できる。本資料は紅葉山文庫の旧蔵書で、『御書物方來歴志』にも記載がある。

#### 【書誌】

外題・①「源平闘諍録 一之上／共五冊」左肩無地料紙題簽(二六・五糎×三・三糎)に墨書、②「源平闘諍録 一之下」(同)、③「源平闘諍録 三二(同)」、④「源平闘諍録 八之上」(同)、⑤「源平闘諍録 八之下」(同)

内題・「源平闘諍録」

表紙・紺色表紙(二六・五糎×一六・五糎)

見返し・①「日本政府図書」(蔵書票)

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・七糎

匡郭・四周単辺(二二・七糎×一五・〇糎)、有界(空押)

墨付丁数・①三九丁、②四〇丁、③二八丁、④三二丁、⑤三七丁

印記・①本文末尾「日本政府図書」、②一才「日本政府図書」「内閣文庫」「秘閣図書之章」、本文末尾「日本政府図書」「内閣文庫」、③一才「日本政府図書」、本文末尾「日本政府図書」「内閣文庫」、④一才「日本政府図書」「内閣文庫」「秘閣図書之章」、本文末尾「日本政府図書」「内閣文庫」、⑤一才「日本政府図書」、本文末尾「内閣文庫」

#### 【写年・書写者】

②四〇才に「本云建武四年二月八日 又文和四年三月廿三日書写之也」とある。これによるならば、本資料の書写は文和四年(一二五五)

だが、この奥書も本奥書だとすると、さらに後代の書写の可能性がある(山田孝雄『平家物語考』勉誠社、一九六八)。

【五八】源平闘諍録 写年不明 五冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号二〇四・〇〇〇七」

本資料は前掲資料『源平闘諍録』（特〇九三・〇〇〇三）の写本で、前掲資料同様、伝存する三巻五冊の書写。袋綴。

本資料は前掲資料を基に書写したものと考えられ、『重訂御書籍来歴志』に「別ニ一通ヲ写シテ副セラル」とあるのが本資料のことと思われる。これによれば原本（特〇九三・〇〇〇七）の虫損がひどかったものと見え、『御書物方日記』にも天明六年十二月に虫損の修復が命じられていることが記されている。

①見返しに「日本政府図書」の蔵書票が貼付されているほか、各冊一オの目録冒頭に「日本政府図書」の蔵書印あり。また各冊本文冒頭に「日本政府図書」および「内閣文庫」、各冊本文末尾に「日本政府図書」「内閣文庫」の印が捺されている。

【書誌】

外題・①⑤「源平闘諍録 一上（二下・五・八上・八下）」左肩四周  
双边刷題簽（一七・二糎×三・三糎）に墨書

内題・「源平闘諍録」

表紙・縹色卍字繫艶出表紙（二六・五糎×一八・〇糎）

見返し・①「日本政府図書」（蔵書票）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①三八丁、②三九丁、③二五丁、④三七丁、⑤三六丁

印記・各冊一オ「日本政府図書」

各冊本文冒頭「日本政府図書」「内閣文庫」

各冊本文末尾「日本政府図書」「内閣文庫」

【写年・書写者】

②三九ウに前掲資料と同じ本奥書あり。

「本云建武四年二月八日 又文和四年三月廿三日書之也」

本書の写年についてははっきりしない。『御書物方日記』の記載を見るに、天明〳寛政頃か。

【五九】源平盛衰記 慶長年間刊カ 四八冊

岸本由豆流旧蔵 「請求番号特一二六・〇〇〇一」

本資料は軍記物語『平家物語』の異本のひとつ『源平盛衰記』の慶長古活字版である。袋綴。四八冊。

『源平盛衰記』は『平家物語』諸本のうち最も大部で、広本系に分類される。源氏にまつわる説話が大幅に増補されている点が特徴的で、近世期までは『平家物語』とは独立した書物と考えられ、史書に準ずる扱いを受けていた。近年の研究では、延慶本など読み本系の古態を残す本文との関連が指摘され、『平家物語』の異本のうち、長期間に渡って段階的に成立していったことが推定されている。古活字版の場合、漢字片仮名まじりの本文を持ち、古写本の本文を用いているものと推定されている。本資料以降出版された古活字版・製版ともに、ほとんどが本資料を底本としており、広く流布した。（川瀬一馬『古活字版之研究』、昭和四二年）

本資料は雷文繫地唐花文様の艶出を施した金茶色の表紙が付けられている

るが、表紙の状態が良くないため、色・文様ともにはつきりとはわからぬ。また第一冊目から第四五冊目までは同じ大きさ（二六・五糎×一九・五糎）である一方、第四六冊目から第四八冊目までの三冊のみ、高さが二六・〇糎前後でやや小さい。第四六冊目の表紙には、外題が「盛衰記 四十七八 四十六終」とあり、一時的に合冊されていたことがうかがえる。大きさが異なるのは、修復の際の裁断の可能性もあるが、取り合わせ本である可能性も捨てきれない。なお外題は左肩に打付書されているが、左肩の巻数と、左下の巻数は別筆に見える。

本資料は各冊（⑨欠）見返しに信濃国須坂藩主堀直格の蔵書印「花廼家文庫」が見えるが、これは直接本資料に捺印されたものではなく、ほかの紙にすでに捺されたものを切り取って、貼付しなおしたもの。別資料から切り取った可能性もあるが、おそらく改装・修復の際に見返しの紙を取り替えたため、蔵書印部分のみを残して修復後に貼り直したのだろう。

各冊一才（目録冒頭部分）に「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」印あり（②一才「日本政府図書」欠）、各冊二才に「朝田家蔵書」「岸本家蔵書」印あり（③～⑧「岸本家蔵書」欠。これはいずれも国学者の岸本由豆流の蔵書印である。父親は幕府御弓弦師の岸本讃岐で、その旧姓が「朝田」である。

### 【書誌】

外題・①～④「盛衰記 初一（～四十八尾）」左肩打付墨書（※④⑥のみ「盛衰記 四十七八 四十六終」）

内題・「源平盛衰記」

表紙・金茶色雷文繫地唐花文様艶出表紙（二六・五糎×一九・五糎）

（※④⑥～④⑧のみ高さ二六・〇糎、⑨裏表紙は後補代赭色）

見返し・各冊「花廼家文庫」蔵書印貼付（⑨欠）

料紙・楮紙

行数・每半葉二一行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・四周双边（二一・五糎×一六・三糎）

墨付丁数・①二五丁、②二八丁、③三八丁、④三八丁、⑤三三丁、⑥三二丁、⑦二九丁、⑧二八丁、⑨三三丁、⑩三三丁、⑪四〇丁、⑫三〇丁、⑬二八丁、⑭二八丁、⑮三三丁、⑯三〇丁、⑰三九丁、⑱三四丁、⑲二七丁、⑳三二丁、㉑三三丁、㉒三四丁、㉓二八丁、㉔三二丁、㉕二八丁、㉖三五丁、㉗二八丁、㉘三四丁、㉙二七丁、㉚二九丁、㉛二八丁、㉜三四丁、㉝三七丁、㉞四〇丁、㉟四二丁、㊱三三丁、㊲三三丁、㊳三三丁、㊴三三丁、㊵三三丁、㊶三三丁、㊷三三丁、㊸三三丁、㊹三三丁、㊺三三丁、㊻三三丁、㊼三三丁、㊽三三丁、㊾三三丁、㊿三三丁

印記・各冊一才「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」（②一才「日本政府図書」のみ欠）

各冊二才「朝田家蔵書」「岸本家蔵書」（③～⑧二才「岸本家蔵書」欠）

各冊本文末尾「内閣文庫」

### 【刊年・刊行者】

本資料に刊記はないが、慶長年間の刊行と推定されている（川瀬一馬『古活字版之研究』昭和四二年）。版心は花口魚尾・中黒口で「盛衰記 卷一（～四十八）」とある。

【六〇】源平盛衰記 刊年不明 二四冊

内務省地理局（地理局地誌課）旧蔵 「請求番号一六七・〇〇四六」

本資料は軍記物語『平家物語』の異本のひとつ『源平盛衰記』の版本である。袋綴。全四八巻二四冊。製版本。漢字片仮名交じりの本文を持ち、四周双边の匡郭（二二・五糎×一六・五糎）を持つ。

全体的に表紙の状態が悪く、題簽が欠けている冊も多い（②⑦⑧②③欠、③⑥⑨⑩⑬⑭⑯一部欠。また裏表紙が取り換えられている冊もある（⑳㉑㉒代赭色、㉓香色）。

各冊一才に「地誌備用図籍之記」「日本政府図書」の蔵書印あり。これにより内務省地理局の旧蔵であることがわかる。

【書誌】

外題・①～㉒「源平盛衰記 目録（〜四十七之八）」左肩四周双边刷題  
簽（一八・〇糎×四・〇糎）※②⑦⑧②③欠、③⑥⑨⑩⑬⑭⑯一部欠

内題・「源平盛衰記」

表紙・紺色表紙（二七・〇糎×一九・三糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二二・五糎

匡郭・四周双边（二二・五糎×一六・五糎）

墨付丁数・①二二丁、②五四丁、③六三丁、④五五丁、⑤四八丁、⑥五四丁、⑦五八丁、⑧五七丁、⑨五三丁、⑩六二丁、⑪四九丁、⑫四一丁、⑬五〇丁、⑭六三丁、⑮四七丁、⑯五二丁、⑰六六丁、⑱六二丁、⑲五六丁、⑳五八丁、㉑五〇丁、㉒五〇丁、㉓五四丁、㉔五二丁  
印記・各冊一才「地誌備用図籍之記」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本資料には刊記の記載がないため、刊年・刊行者ともにはつきりし

ない。

【六一】源平盛衰記 刊年不明 二四冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号一六七・〇〇四九」

本資料は軍記物語『平家物語』の異本のひとつ『源平盛衰記』の版本である。袋綴。二巻ずつ合冊（①は「総目録」「巻一」「巻二」）されて、全四八巻二四冊。

本資料は前掲資料（請求番号一六七・〇〇四六）と同じ製版本。漢字片仮名交じりの本文を持ち、四周双边の匡郭（二二・五糎×一六・五糎）を持つ。

各冊一才に「秘閣図書之章」（甲種・乙種）の二種類の捺印あり『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』。

表紙は縹色で、左肩に四周双边の刷題簽で外題を出している。紅葉山文庫旧蔵書によく見られる装丁で、後年の修復で取り換えられたもの。全体的に状態は良いが、第二四冊目の虫損が目立つ。

【書誌】

外題・①～㉒「源平盛衰記 総目録／二二（〜四十七之八）」左肩四周双边刷題簽（一八・三糎×四・〇糎）

内題・「源平盛衰記」

表紙・縹色表紙（二七・二糎×一九・〇糎）  
見返し・①「日本政府図書」（蔵書票）

料紙・楮紙

行数・每半葉二行



字面高さ・二一・五糎

匡郭・四周双辺（二一・五糎×一六・三糎）

墨付丁数・①六五丁、②六三丁、③五五丁、④四八丁、⑤五四丁、⑥五七丁、⑦四七丁、⑧五三丁、⑨六一丁、⑩四七丁、⑪四〇丁、⑫五〇丁、⑬五三丁、⑭五三丁、⑮四七丁、⑯五一丁、⑰六六丁、⑱六二丁、⑲五六丁、⑳五八丁、㉑五〇丁、㉒五〇丁、㉓五四丁、㉔五一丁  
印記・各冊一才「秘閣図書之章」（甲・乙）

【刊年・刊行者】

本資料には刊記の記載がないため、刊年・刊行者ともにはつきりしない。

【六一】源平盛衰記 刊年不明 二五冊

教部省旧蔵 「請求番号二〇四・〇〇〇八」

本資料は軍記物語『平家物語』の異本のひとつ『源平盛衰記』の製版本。袋綴。二巻ずつ合冊されており、かつ総目録一冊が独立しているのので、四八巻二五冊である。

各冊の冒頭には不明印記（円型陽刻朱印、直径三・五糎）あり。ほか「日本政府図書」「図書局文庫」「太政官文庫」「教部省文庫印」の捺印あり。各冊本文末尾に「図書局文庫」「太政官文庫」印が見える。

第三冊目（請求番号二〇四・〇〇〇八（三））が巻四十七・四十八となっており、以降、冊次番号と巻数に差異が生じている。

第三冊目の裏見返しには次のような墨書あり。

「文化八辛未稔晚秋宮豊秋等／修理之」

【書誌】

外題・②④「源平盛衰記 一之一（四十五之四十六）」左肩四周双辺刷題簽（二七・三糎×四・〇糎）（※①欠、③「源平盛衰記 四十七之四十八）」

内題・「源平盛衰記」

表紙・紺色表紙（二六・〇糎×一九・二糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二二行

字面高さ・二二・五糎

匡郭・四周双辺（二二・五糎×一六・〇糎）

墨付丁数・①二二丁、②四四丁、③五一丁、④六三丁、⑤五五丁、⑥四九丁、⑦五五丁、⑧五八丁、⑨四七丁、⑩六三丁、⑪六二丁、⑫四九丁、⑬四一印丁、⑭五〇丁、⑮五四丁、⑯五三丁、⑰四七丁、⑱五三丁、⑲六六丁、⑳六一丁、㉑五六丁、㉒五八丁、㉓五〇丁、㉔五〇丁、㉕五四丁

印記・各冊一才「日本政府図書」「図書局文庫」「太政官文庫」「教部省文庫印」不明印記（円型陽刻朱印、直径三・五糎）  
各冊末尾「図書局文庫」「太政官文庫」

【刊年・刊行者】

本資料には刊記の記載がないため、刊年・刊行者ともにはつきりしない。

【六三】源平盛衰記 刊年不明 二四冊

内務省旧蔵 「請求番号二六三・〇〇二八」



には『曾我物語』を語る「女盲」の姿が描かれており、こういった譬女たちによる語り物として全国に伝播したとも考えられている。幸若舞などの芸能に大きな影響を与え、『曾我物語』を下敷きにした「曾我物」と呼ばれる一連の作品群を成している。

『曾我物語』の諸本は主に「真名本」「大石寺本」「仮名本」の三系統に分類される。本資料は「真名本」のうち、天文二年（一五五三）に書写された本門寺本系統の写本で、各冊末尾に本門寺の元奥書が載る。仮名の傍訓が多く付されているのが特徴である。

本資料は火災に遭っていると見られ、全体的に煤による汚損が目立つ。

#### 【書誌】

外題・①～⑩「曾我物語 一（～十）」左肩無地料紙題簽（二四・八糎×三・〇糎）に墨書

内題・「曾我物語」

表紙・縹色表紙（二三・八糎×一六・三糎）

料紙・楮紙

遊紙・①「伯耆国ノ鍛冶安綱力作ノ太刀曾我ノ五郎ニ箱根別当給之」の墨書あり

扉・各冊一丁ずつ「富士山本門寺常住ノ曾我物語卷第一（～十）ノ日義」

行数・每半葉八行

字面高さ・一八・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①三〇丁、②二八丁、③二九丁、④二四丁、⑤二七丁、⑥二八丁、⑦二九丁、⑧二七丁、⑨三三丁、⑩三四丁

印記・各冊本文冒頭・末尾「内閣文庫」

#### 【写年・書写者】

本資料の写年・書写者ともに不明。「内閣文庫」のほかに蔵書印記もなく、旧蔵者もはっきりしない。

【六五】曾我物語 天保五年以降 五冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇四・〇〇一五」

本資料は前掲資料同様、曾我兄弟の仇討ちを描いた『曾我物語』の写本で、二巻で一冊に合冊されているので、全一〇巻五冊。

前掲資料と同じ本門寺系統の写本だが、序文に天保五年（一八三四）の屋代弘賢の識語、本文末に本門寺の日堯の後序があるのが特徴。この後序によれば、もとの日義筆の写本の修復・校訂を施したものが本書に当たり、前掲資料が「重須本門寺本」と称されるのに対し、本資料は「日堯繕写重須本門寺本」と称される。

第一冊目の見返しに、大正十五年（一九二六）の年記のある二六・〇糎×二二・〇糎のふせんが添付されている。改装の際に上下を切ったと思われる、一部欠。墨書で次の通り。

「この本は本門寺本の副本也 日堯のなしたるもの也 卷一・六 日布手校 卷七・一〇 箕山手校ノ本門寺本は日義自筆にてこの副本の原本也。

世に本門寺本といふもの之也ノ小宮昌世の序文は大石寺と本門寺とを混同して同一と見たり。故に又ノ屋代弘賢その誤を踏襲せり。されど両寺は全く別也ノ今夏大石寺及び本門寺にて調査せしに本門寺には原本副本共ノ存候 大石寺には今無之 大正十五年九月十六日記（印記欠）ノ内閣文庫の天文本は即ち本門寺本の原本（日義筆）と同物也」

表紙右肩・各冊本文冒頭と本文末尾に「昌平坂学問所」の朱印あり。表紙は唐草文様の型押で、全体的に状態が良い。

【書誌】

外題・①～⑩「曾我物語 一(三・五・七・十)」左肩四周双边題簽(一六・七糎×三・〇糎)に墨書

内題・「曾我物語」

表紙・縹色地唐草文様型押表紙(二六・三糎×一八・五糎)

料紙・斐楮混ぜ漉き

遊紙・なし

扉・なし

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二〇・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①四五丁、②三九丁、③四〇丁、④三九丁、⑤四八丁

印記・表紙・各冊本文冒頭・末尾「昌平坂学問所」

【写年・書写者】

本資料の写年・書写者ともに不明。屋代弘賢の識語の年記が天保五年なので、少なくともその後になる。

【六六】曾我物語 刊年不明 一二冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇四・〇〇一〇」

本資料は曾我兄弟の仇討ちを描いた『曾我物語』の刊本で、全一二巻一二冊。袋綴。

本文部分は、江戸時代に一般的に流布していた版本と見られる。漢字平仮名混じり。

表紙は紺地に金泥で秋草文様を描いた豪華なものである。見返しも雲母引きの料紙に銀切箔を散らしたもの。題簽にも冊によっては金砂子が用いられている(③⑧⑨の題簽は横刷毛目で別筆のため後補と考えられる)。表紙はもともと別の写本に用いられていたものを、本資料に転用したものと想像される。

各冊とも一才に「大日本帝国図書」「太政官文庫」「明治九年購求」の印、また本文冒頭に「日本政府図書」、本文末尾に同印と「大日本帝国図書印」がある。この印記によれば、本資料は明治九年に政府によって購入されたものである。

【書誌】

外題・①②④⑤⑥⑦⑩⑪⑫「曾我物語 巻第一(～巻第十二)」左肩紙

粉色地金砂子料紙題簽(一七・二糎×三・七糎)、③⑧⑨「曾我物語

巻第三(巻第八・巻第九)」左肩横刷毛目料紙題簽(一七・三糎×三・七糎)

内題・「曾我物語」

表紙・紺地金泥秋草文様表紙(二六・五糎×一九・〇糎)

料紙・楮紙

遊紙・一丁

扉・なし

行数・每半葉一二行

字面高さ・二一・七糎

匡郭・四周单边(二一・七糎×一七・〇糎)

墨付丁数・①五二丁、②三四丁、③三〇丁、④三五丁、⑤四六丁、⑥

三三丁、⑦三六丁、⑧三七丁、⑨三三三丁、⑩二四丁、⑪二〇丁、⑫一丁

印記・各冊一才「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「明治九年購求」

二才「日本政府図書」

本文末尾「日本政府図書」「大日本帝国図書印」

【刊年・刊行者】

本資料には刊記がなく、刊年・刊行者については不明。

【六七】曾我物語<sup>(マ)</sup> 元禄五年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇四・〇〇一七」

本資料は元禄五年（一六九二）に刊行された『曾我物語』の版本で、漢字片仮名混じりの本文を持つ。袋綴。全二卷五冊。

外題は①～④まで欠けており、②～④は打付書。⑤のみ砥粉色の料紙（一八・〇糎×三・八糎）に「曾我物語 五」と墨書してある。内題は「曾我物語」となっており、目録書名はこの内題に基づいている。

本資料は各冊の末尾に「昌平坂学問所」の墨印、および「文化戊辰」の朱印が捺されている。これにより、本資料は文化五年（一八〇八）に昌平坂学問所に収められたことがわかる。

裏見返しの下に「中村八」と墨書あり。

【書誌】

外題・①一部欠、②～④「曾我物語 二（～四）」左肩打付墨書、⑤「曾我物語 五」左肩砥粉色料紙題簽（一八・〇糎×三・八糎）に墨書

内題・「曾我物語」

表紙・香色波文艶出表紙（二七・〇糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

遊紙・なし

扉・なし

行数・每半葉一一行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・四周单边（二二・〇糎×一五・五糎）

墨付丁数・①二一丁、②二四丁、③二〇丁、④三三丁、⑤二四丁

印記・各冊一才「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」

本文末尾「昌平坂学問所（墨印）」「文化戊辰」

【刊年・刊行者】

⑤二四ウの刊記は以下の通り。

「元禄五年壬申正月吉日／京師書林／躍鯉堂梓刊」

刊行者は京の書肆である大井躍鯉堂のこと。

【六八】義経記 江戸時代初期か 三冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇四・〇一三八」

本資料は源義経の生涯を描いた軍記物語『義経記』の写本。一般的に『義経記』は全八巻だが、本資料の場合は巻三までしか現存せず、全三冊。

紺色の帙（二九・三糎×二二・五糎×五・五糎）に収められているが、この帙はごく近年のものである。左肩に無地の料紙の題簽（二〇・三糎×四・〇糎）で「義経記」と墨書されている。

表紙は金茶色布目型押で、題簽は第一冊目のみ欠。左肩に打付書されている。

本資料は各冊の一丁目に「和学講談所」の印があり、和学講談所旧蔵書であることがわかる。

【書誌】

外題・①「義経記 一」題簽欠、左肩打付墨書、②③「義経記 二（〜

三尾闕）」左肩無地料紙題簽（二二・〇糎×五・〇糎）

内題・「義経記」

表紙・金茶色布目型押表紙（二八・五糎×二二・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二三・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①五七丁、②五〇丁、③五七丁

印記・①一才「書籍館印」「日本政府図書」「内閣文庫」「和学講談所」

「浅草文庫」

②一才「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」

②一才「浅草文庫」

③一才「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」

【写年・書写者】

本資料の写年・書写者に関しては不明。江戸時代初期か。

【六九】義経記 寛文一〇年刊 八冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇四四・〇〇〇三」

拙稿「当館所蔵の絵入り本解題①」（『北の丸』四五号、二〇一二年）を参照されたい。

【七〇】太平記 天正六年写 四一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特一〇〇・〇〇〇二」

本資料は南北朝時代の動乱を描いた軍記物語『太平記』の写本で、天正六年（一五七八）の奥書を持つもの。通称を「野尻本」あるいは「内閣文庫本」と称する。全四二巻のうち、巻三を欠き、巻八は補写。石清水八幡宮に関する別本一冊を加えて、全四二巻四一冊。

『太平記』は後醍醐天皇の倒幕から楠木正成の活躍、そしてその後実権を握る足利氏の内紛など鎌倉幕府から室町幕府へと移り変わる時代の混乱を描いた軍記物語である。一般的には全四〇巻で、成立年代・作者ともにはっきりしない。諸本はおよそ三系統に分類されることが多いが、諸説あつて決着を見ない。

『太平記』は故事の引用が多く、先行する軍記物語である『平家物語』に比べ、学術的に劣るという評価を受けがちだが、中世当時の故事・説話を網羅しており、実用的な側面も強く、近世には史書・兵法書に準じる扱いを受けていた。後世に与えた影響は多大で、軍記物語としては『平家物語』と双璧をなす存在である。

本資料の各冊末尾には、書写者である野尻慶景の自筆奥書があり、それによれば、本資料は、出雲大社の社家である千家義広所蔵本を借りて移したものの、複数の筆跡が見られ、数人による寄り合い書きである。奥書によ

ればおよそ一〇日間で書き写したとある。巻八のみ、江戸時代初期の補写。本資料は紅葉山文庫の旧蔵書で、『重訂御書籍来歴志』に記載がある。また校訂の付箋が各所に貼付されている。

【書誌】

外題・「天正太平記 一（四二）」左肩無地料紙題簽（一七・八糎×三・五糎）に墨書

内題・「太平記」

表紙・金茶色地横刷毛目表紙（二七・〇×一九・八糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①三六丁、②四七丁、③四六丁、④三〇丁、⑤二九丁、⑥二三丁、⑦三八丁、⑧四六丁、⑨四五丁、⑩三三丁、⑪四七丁、⑫四四丁、⑬五一丁、⑭三六丁、⑮四六丁、⑯六六丁、⑰六一丁、⑱三二丁、⑲三五丁、⑳三九丁、㉑三六丁、㉒二四丁、㉓四五丁、㉔六〇丁、㉕五八丁、㉖二二丁、㉗四二丁、㉘四二丁、㉙三四丁、㉚三九丁、㉛三六丁、㉜四九丁、㉝三二丁、㉞三五丁、㉟四三丁、㊱四六丁、㊲二六丁、㊳四〇丁、㊴四五丁、㊵一七丁、㊶二二丁

印記・各冊本文冒頭「秘閣図書之章」「日本政府図書」

⑩「三才」「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料には各冊末尾にほぼ同内容の自筆奥書がある。書写者は「野尻藏人佐」「源慶景」と署名しているが、これは前述の野尻慶景のこと。「雲州三沢」（現在の島根県奥出雲町）の住人と記載する。年記は「天

正六」とある。

【七一】太平記 慶長一四年刊 四〇冊

町田久成旧蔵 「請求番号一六七・〇〇六一」

本資料は軍記物語『太平記』の古活字版で、漢字ひらがな混じり文で刊行されたものでは最初期のものに相当する。袋綴。四〇巻四〇冊。

本資料は一〇冊ずつ四つの帙に分けられて収納されている。帙は紺色で、大きさはそれぞれ①二八・五糎×二〇・五糎×九・〇糎、②二八・五糎×二〇・五糎×一〇・〇糎、③二八・五糎×二〇・五糎×八・〇糎、④二八・五糎×二〇・五糎×八・〇糎。左肩に無地の料紙で題簽（①④二〇・七糎×三・七糎）あり。それぞれ①「太平記 慶長十四年古活 元」、②「太平記 慶長十四年古活 亨」、③「太平記 慶長十四年古活 利」、④「太平記 慶長十四年古活 貞」と墨書されている。

表紙は香色で、雷文繫地唐花文様を艶出したもの。三〇冊目の裏表紙のみ砥粉色の無地。外題は左肩に打付書されている。

本資料の各冊一才には「町田久成献納之章」の印があり、町田久成の旧蔵書だったことがわかる。

【書誌】

外題・「太平記」左肩打付墨書

内題・「太平記」

表紙・香色雷文繫唐花文様艶出表紙（二八・〇糎×二〇・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二三・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①三四丁、②五三丁、③三八丁、④四九丁、⑤三三丁、⑥三七丁、⑦四一丁、⑧五〇丁、⑨五二丁、⑩五八丁、⑪三九丁、⑫五九丁、⑬四六丁、⑭六六丁、⑮五二丁、⑯六六丁、⑰八〇丁、⑱六六丁、⑲三九丁、⑳四八丁、㉑四五丁、㉒三六丁、㉓三〇丁、㉔五四丁、㉕二七丁、㉖五九丁、㉗四三丁、㉘四二丁、㉙五二丁、㉚五八丁、㉛四三丁、㉜五五丁、㉝五二丁、㉞四四丁、㉟五四丁、㊱三九丁、㊲四一丁、㊳四九丁、㊴五七丁、㊵二〇丁

【刊年・刊行者】

④二〇オウにかけて跋文あり。刊記は「慶長己酉」とあり、慶長一四年のことと考えられる。また「才雲判之」と見えるが、刊行者の才雲に関しては伝未詳。

【七二】 太平記 「元和二年」刊 二〇冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号特一二七・〇〇〇一」

本資料は江戸時代初期に刊行された『太平記』の古活字版。版面から元和二年版と想定されている。漢字片仮名混じりの本文。合冊されており、全四〇巻二〇冊。

本資料の表紙右肩には、昌平坂学問所の墨印が捺されており、また、各冊本文末には同墨印と「文政壬午」の朱印があることから、文政五年に昌平坂学問所に新収されたものであるとわかる。

代赭色の表紙は、いずれも経年による痛みが見受けられる。二〇冊とも裏表紙は香色の無地に取り換えられている。

【書誌】

外題・「太平記」 左肩打付墨書

内題・「太平記」

表紙・代赭色表紙（二七・八糎×二〇・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二二行

字面高さ・二二・七糎

匡郭・四周单边（二二・七糎×一六・五糎）

墨付丁数・①五九丁、②五〇丁、③三九丁、④六四丁、⑤六五丁、⑥五六丁、⑦六八丁、⑧七三丁、⑨八八丁、⑩五三丁、⑪四八丁、⑫四八丁、⑬五八丁、⑭五一丁、⑮五五丁、⑯七〇丁、⑰六〇丁、⑱五七丁、⑲五四丁、⑳四六丁

印記・表紙右肩「昌平坂学問所」（墨印）

①一オ「大学校図書之印」「浅草文庫」「図書局文庫」「日本政府図書」

①本文末尾「日本政府図書」「昌平坂学問所」「図書局文庫」「文政壬午」

②③④一オ「大学校図書之印」「浅草文庫」「日本政府図書」

③④⑤本文末尾「昌平坂学問所」「文政壬午」

【刊年・刊行者】

本資料には刊記がないため、刊年・刊行者についてははっきりしない。ただし、印刷面や活字から判断するに元和二年版と推定される。



【七三】 太平記 元和八年刊 二一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号一六七・〇〇六六」

本資料は軍記物語『太平記』の刊本で、元和八年（二六二二）に刊行されたもの。全四〇巻に劍卷を加え、さらに合冊して全四一巻二冊。袋綴。

第一冊目が「目録」と「劍卷」で、第二冊目から本文。全体に状態は良くなく、四一冊目は特に水損の跡が目立つ。

本文は漢字片仮名混じりで、ふりがな付き。整版である。

香色の帙にそれぞれ一冊と一〇冊に分けて収納されている。①～⑪まで収納されている帙は、大きき二七・〇糎×二〇・〇糎×一二・〇糎で、左肩に無地の題簽（一九・〇糎×三・五糎）で「太平記 元和八刊 坤」と出している。⑫～⑳が収納されている帙は大ききが二七・〇糎×二〇・〇糎×一〇・五糎で、同筆で「太平記 元和八刊 乾」と題簽あり。帙およびその題簽は後補だと思われるが、題簽を貼付する段階で乾坤が反対になったと思われる。

表紙は帙よりも濃い香色の無地で、右肩に「昌平坂学問所」の墨印がある。ただし、①②⑥⑩⑪の五冊については墨印が見当たらない。これは表紙を新しいものに取り換えたためと想像される。題簽もほとんどが脱落していて、多くが左肩に打付書。⑯⑳㉑のみ四周双边の刷題簽（いずれも一部欠）が貼付されているが、これも後補である。

各冊本文末尾には「昌平坂学問所」の墨印と「文政戊寅」の朱印あり。これにより、本資料が文政一三年（一八三〇）に昌平坂学問所に新収されたものとわかる。

【書誌】

外題・①～⑮⑰～⑳「太平記 目録／劍卷（一／二／四十五／四十六）」

左肩打付墨書、⑯⑳㉑「太平記 二十九／三十（三十七／三十八・三十九／四十）」左肩四周双边刷題簽（一部欠）に墨書

内題・「太平記」

表紙・香色表紙（二六・五糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二一・七糎

匡郭・四周双边（二一・七糎×一六・五糎）、無界

墨付丁数・①四二丁、②五二丁、③四二丁、④四二丁、⑤五六丁、⑥六九丁、⑦五八丁、⑧七二丁、⑨七七丁、⑩九三丁、⑪五六丁、⑫五二丁、⑬五二丁、⑭六二丁、⑮五四丁、⑯五八丁、⑰六三丁、⑱六三丁、⑲六〇丁、⑳五七丁、㉑四九丁

印記・①一才「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」不明墨印（一・五糎×〇・八糎）

②一才「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「子」

「末」（墨印）

③～⑫一才「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」

⑬～⑮⑰～⑳表紙左肩「昌平坂学問所」

各冊末尾「昌平坂学問所」「文政戊寅」

【刊年・刊行者】

⑳四〇才に跋文あり。刊記は次の通り。

「于時元和八壬戌臘月吉辰／洛下三条東洞院諏訪町／杉田良庵玄与（印）」

【七四】 太平記 写年不明 四〇冊

林家旧蔵 「請求番号一六七・〇〇六三」

本資料は軍記物語『太平記』の写本で、林家に所蔵されていたもの。袋綴。全四〇巻四〇冊。

本資料には、やや場所の違いこそあるものの、各冊一才に「林氏蔵書」「浅草文庫」「大学校図書之記」（大学蔵書）「日本政府図書」の印があり、また表紙および本文末尾に「昌平坂学問所」の墨印がある。このことから本資料は、林家の所蔵から昌平坂学問所に移り、のち政府の所蔵となったことがわかる。

本資料の表紙にはすべて「昌平坂学問所」の印が見えるが、表紙や外題については冊次によってまちまちである。昌平坂学問所の収蔵となった時点ですでに、表紙が統一されていなかったことがわかる。分類は以下の通りである。

- (ア) 香色表紙（二六・七糎×二〇・八糎）に左肩打付墨書「太平記巻第一（第二十九）」：①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- (イ) 同表紙に別筆で左肩打付墨書「太平記 三（三十八）」：③⑧
- (ウ) 同表紙に縹色題簽（一六・五糎×三・〇糎）に墨書「太平記 巻第十二（廿七）」：⑫⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- (エ) 同表紙、外題欠：⑦⑪
- (オ) 代赭色表紙（二七・〇糎×二〇・七糎）に縹色題簽（一六・五糎×三・二糎）に墨書「太平記 巻第廿四（廿四）」：⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- (カ) 同表紙に砥粉色地雲文題簽（二六・八糎×三・二糎）に墨書「太平記 四」：④

(キ) 同表紙に左肩打付墨書「太平記 六（第十七）」⑤「五」、③⑥

「三十六」：⑤⑥⑩⑬⑰⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺

(ク) 同表紙に外題欠：⑦⑪⑬⑱㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺

(ケ) 縹色表紙（二七・〇糎×二〇・八糎）に左肩打付墨書「太平記 巻四十」：④⑩

本資料は一般的には甲・乙・丙・丁の四種のうち、甲類に分類される写本で一般的に内閣文庫本と呼ばれる写本である。

本資料②一ウに以下のような墨書あり。

「古本并／薩摩本二十二之巻欠／此一冊以新板本補之然与古本二十三之巻／重複又有異同」

本資料は冊次毎に筆跡が異なっており、複数人による書写である。

【書誌】

- 外題・前述の通り
- 内題・「太平記」
- 表紙・前述の通り
- 料紙・楮紙
- 行数・每半葉一〇行
- 字面高さ・二三・〇糎
- 匡郭・無辺無界
- 墨付丁数・①三三丁、②四〇丁、③一九丁、④三三丁、⑤三三丁、⑥二七丁、⑦三〇丁、⑧三九丁、⑨四〇丁、⑩三九丁、⑪二七丁、⑫五一丁、⑬三三丁、⑭五二丁、⑮四五丁、⑯三八丁、⑰五九丁、⑱四九丁、⑲二八丁、⑳三七丁、㉑三五丁、㉒三五丁、㉓二四丁、㉔二四丁、㉕三七丁、㉖五七丁、㉗五二丁、㉘三三丁、㉙三九丁、㉚三三丁、㉛三六丁、㉜四三丁、㉝三二丁、㉞三三丁、㉟四四丁、㊱四〇丁、㊲二

五丁、<sup>38</sup>二六丁、<sup>39</sup>四〇丁、<sup>40</sup>三五丁

印記・各冊表紙「昌平坂学問所」

各冊冒頭「林氏蔵書」「浅草文庫」「大学校図書之記」（「大学蔵書」）「日

本政府図書」

各冊末尾「図書局文庫」「日本政府図書」「昌平坂学問所」

【写年・書写者】

本資料の写年・書写者に関しては不明。江戸時代初期か。

【七五】 太平記 天和元年刊 二一冊

旧蔵者不明「請求番号一六七・〇〇六七」

本資料は軍記物語『太平記』の天和元年（一六八一）版。四〇巻に「劍巻」を加え、全四一巻二冊。袋綴。

本文は漢字片仮名混じりで、ふりがな付き。每半葉一四行。

本資料は各冊一才に「太政官文庫」「日本政府図書」の捺印があるが、ほかに蔵書印は見当たらず、旧蔵者についてははっきりしない。

目録書名に括弧書きで「新刻太平記」とあるが、これは本資料の外題を採ったもの。四周双边の刷題簽で、角書に「新刻」とある。

【書誌】

外題・「新刻／太平記 目録并劍巻（廿九之四十一）」左肩四周双边刷

題簽（一八・五糎×三・八糎）（<sup>2</sup>のみ題簽が脱落しており、そのあと

に墨書で「太平」とあり）

内題・「太平記」

表紙・紺色表紙（二七・〇糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一四行

字面高さ・二二・二糎

匡郭・四周双边（二二・二糎×一六・七糎）、無界

墨付丁数・①四一丁、②三九丁、③三八丁、④三二丁、⑤四二丁、⑥

五〇丁、⑦四一丁、⑧五二丁、⑨五六丁、⑩六八丁、⑪四二丁、⑫三

九丁、⑬三八丁、⑭四七丁、⑮四一丁、⑯四五丁、⑰四九丁、⑱四八

丁、<sup>19</sup>四六丁、<sup>20</sup>四三丁、<sup>21</sup>三七丁

印記・各冊一才「太政官文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

<sup>21</sup>三七才の刊記は以下の通り。

「于時天和元歳 丸屋源兵衛／辛酉霜月吉辰 金屋長兵衛／開板」

丸屋源兵衛は京の書肆で、本姓瀬尾氏。奎文館。金屋長兵衛も京の書肆で、天和頃は二条に店を構えていたと思われる。のち観世・金剛の謡本を独占出版し、家元直結の版元となる（現在の檜書店）。

【七六】 太平記 刊年不明 一九冊

元老院旧蔵 「請求番号一六七・〇〇六九」

本資料は軍記物語『太平記』の版本で、前掲の天和元年版の後印と想定されるもの。四〇巻に劍巻を加え、全四一巻一九冊。袋綴。

本資料は前掲資料と同版だが、版木の摩滅の程度から見て本資料は後印と考えられる。漢字片仮名混じりの本文、ふりがな付き。每半葉一四行。

表紙と題簽はすべて後補と考えられる。

本資料の各冊冒頭と本文末尾には、旧蔵者のものと思われる「本鉄」（楕田型陽刻墨印、二・五糎×二・〇糎）の印あり。貸本屋か。

【書誌】

外題・「太平記 序 目録（廿九 四十）」左肩四周双边刷題簽（二八・五糎×三・五糎）に墨書  
内題・「太平記」

表紙・香色表紙（二五・〇糎×一八・八糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一四行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・四周双边（二二・〇糎×一六・七糎、無界

墨付丁数・①四二丁、②九九丁、③三三丁、④一〇六丁、⑤四三丁、

⑥五二丁、⑦五六丁、⑧六八丁、⑨四二丁、⑩三九丁、⑪三八丁、⑫

四七丁、⑬四一丁、⑭四五丁、⑮四九丁、⑯四八丁、⑰四六丁、⑱四

三丁、⑲二七丁

印記・各冊冒頭「元老院図書記」「太政官文庫」「本鉄」（楕田型陽刻墨

印、二・五糎×二・〇糎）

各冊末尾「内閣文庫」「本鉄」

【刊年・刊行者】

⑲三七才に以下の刊記あり。

「于時天和元歳 丸屋源兵衛／辛酉霜月吉辰 金屋長兵衛／開板」

【七七】 太平記 貞享五年刊 二一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇二八・〇〇〇六」

本資料は軍記物語『太平記』の貞享五年版。全四〇巻に劍卷を加え、全四一巻二一冊。袋綴。

漢字片仮名混じりの本文にふりがな付き。每半葉二二行（①劍卷は二二行）で、前掲の天和元年版と異なり、匡郭は四周单边（二二・二糎×一六・七）である。

本資料の各冊一才には「秘閣図書之章」の印があり、紅葉山文庫の旧蔵書と推定される。表紙は改装後補だが、題簽は元のままか。外題は「新刻／太平記 目録并劍卷（廿九之四十）」とあり、「新刻」は角書。ほかの紅葉山文庫旧蔵に見られる、真新しい縹色の表紙で、状態は全体的に極めて良好。

【書誌】

外題・「新刻／太平記 目録并劍卷（廿九之四十）」左肩四周双边刷

題簽（一九・〇糎×三・九糎）

内題・「太平記」

表紙・縹色表紙（二六・五糎×一九・〇糎）

見返し・①「日本政府図書」蔵書票貼付

遊紙・各冊一丁

料紙・楮紙

行数・每半葉二二行（①每半葉二二行）

字面高さ・二二・二糎

匡郭・四周单边（二二・二糎×一六・七糎、無界

墨付丁数・①四六丁、②五九丁、③五三丁、④四四丁、⑤五六丁、⑥

六九丁、⑦五八丁、⑧八二丁、⑨七七丁、⑩九四丁、⑪五七丁、⑫五

三丁、⑬五二丁、⑭六一丁、⑮五四丁、⑯五八丁、⑰六四丁、⑱六三

丁、①九六〇丁、②五七丁、③四九丁

印記・各冊冒頭「秘閣図書之章」

②一才「秘閣図書之章」「日本政府図書」「内閣文庫」

③四九ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

【刊年・刊行者】

④四九ウ以下の通り、刊記あり。

「于時貞享五戊辰年／孟春吉辰 新刊／重而加校正畢 寺町通二条

下町／中村五兵衛」

中村五兵衛は京の書肆で、号を桐花堂。日蓮宗の仏書を多く出版し

ている。

【七八】参考太平記 元禄四年刊 四一冊

元老院旧蔵 「請求番号二六七・〇〇三三」

本資料は軍記物語『太平記』の注釈書で、元禄四年（一六九二）に刊行されたもの。全四一巻四二冊。袋綴。

『参考太平記』は『大日本史』編纂のため、徳川光圀の命によって『参考元物語』『参考平治物語』『参考源平盛衰記』とともに、水戸彰考館の今井弘濟・内藤貞顕によって編まれたものである。『太平記』の異本九部と刊本の合わせて一〇部を比較検討し、校訂・注釈を施している。このうち、数部が現在行方不明となっており、本資料によってそのテキストが伝わっている。

①「首卷」には詳細な凡例が載る。匡郭は四周双边（二・〇糎×一五・〇糎）で、有界、每半葉八行。②「卷二」以降は、匡郭は同一だが、無界。

每半葉九行。注記は本文に小字双行で記載。

本資料には各冊一才に「元老院図書記」「太政官文庫」の印があり、元老院の旧蔵であることがわかる。

【書誌】

外題・参考太平記 首卷（四十止）左肩四周双边刷題簽（一九・〇糎×三・二糎）

内題・「太平記」

表紙・栗皮色雲文艶出表紙（二六・〇糎×一八・五糎）

料紙・楮紙

行数・①每半葉八行、②④每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・①四周双边（二・〇糎×一五・〇糎）、有界、②④四周双边（二・〇糎×一五・〇糎）、無界

墨付丁数・①四六丁、②五九丁、③七九丁、④五九丁、⑤五一丁、⑥

四五丁、⑦四五丁、⑧一〇四丁、⑨六四丁、⑩八二丁、⑪七一丁、⑫

五一丁、⑬七八丁、⑭七六丁、⑮九六丁、⑯六九丁、⑰一二五丁、⑱

一〇五丁、⑲七三丁、⑳五四丁、㉑五三丁、㉒八〇丁、㉓三六丁、㉔

三二丁、㉕六二丁、㉖五一丁、㉗七二丁、㉘五四丁、㉙三四丁、㉚六

七丁、㉛七〇丁、㉜六四丁、㉝八二丁、㉞六五丁、㉟四九丁、㊱五六

丁、㊲五〇丁、㊳二四丁、㊴四八丁、㊵九〇丁、㊶三三丁

印記・各冊一才「元老院図書記」「太政官文庫」

【刊年・刊行者】

④二三ウに四周单边（二・四・〇糎×五・五糎）の枠内に、以下の通り、刊記あり。

「武江書肆富野治左衛門勝武／元禄四辛未年二月廿五日 寿梓／京

兆書林茨城多左衛門方道(印)

江戸の富野治左衛門は『参考保元物語』『参考平治物語』の版元でもある。京の茨城多左衛門は、一般的には小川多左衛門のこと。号は柳枝軒。曹洞宗御用で知られ、方道は二代目。

【七九】参考太平記 元禄四年刊 四一冊

紅葉山文庫旧蔵か 「請求番号：一六七・〇〇八二」

本資料は前掲資料『参考太平記』の同版本。全四一巻四一冊。袋綴。

前掲資料と同版のため、版面はほとんど同じだが、本資料は第一冊目の遊紙に封面がある(本来は見返しにあるべきだが、改装した際に遊紙に直したか)。封面には、版元の印と魁星印あり。

本資料の各冊冒頭には紅葉山文庫旧蔵書に多い「秘閣圖書之章」二種が捺されているが、ほかにも「北国／西源禪師／卍字堂」(六・五糎×三・五糎)の墨印があり、来歴についてははっきりしない。

状態は前掲資料よりも良好で、版木にも摩滅が少ない。ただし、題簽に關しては冊次によっては脱落しているものもある。

【書誌】

外題・①「参考太平記 首巻」左肩四周双边刷題簽(二八・七糎×三・

八糎)に墨書、②③⑮題簽欠、④⑤⑦⑮⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺「参

考太平記 三(廿八)」左肩四周双边刷題簽(一九・三糎×三・五糎)、

⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺題簽一部欠

内題・「太平記」

表紙・代赭色雷文繫艶出表紙(二七・五糎×一九・〇糎)

遊紙・①封面「江府書肆 松雲齋(印)／参考太平記／京師書堂柳枝軒(印)」

料紙・楮紙

行数・①每半葉八行、②④每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・①四周双边(二一・〇糎×一五・〇糎)、有界、②④四周双边

(二一・〇糎×一五・〇糎)、無界

墨付丁数・①四七丁、②五九丁、③七九丁、④五九丁、⑤五二丁、⑥

四五丁、⑦四五丁、⑧一〇四丁、⑨六四丁、⑩八二丁、⑪七二丁、⑫

五二丁、⑬七八丁、⑭七六丁、⑮九六丁、⑯六九丁、⑰一二五丁、⑱

一〇五丁、⑲七三丁、⑳五四丁、㉑五三丁、㉒八〇丁、㉓三六丁、㉔

三二丁、㉕六二丁、㉖五二丁、㉗七二丁、㉘五四丁、㉙三四丁、㉚六

七丁、㉛七〇丁、㉜六四丁、㉝八二丁、㉞六五丁、㉟四九丁、㊱五六

丁、㊲五〇丁、㊳二四丁、㊴四八丁、㊵九〇丁、㊶三三丁

印記・各冊一才「秘閣圖書之章」(二種)、「北国／西源禪師／卍字堂」

(六・五糎×三・五糎)、①封面に魁星印あり

【刊年・刊行者】

④①二三ウに刊記あり。

「武江書肆富野治左衛門勝武／元禄四辛未年二月廿五日 寿梓／京

兆書林茨城多左衛門方道」

前掲資料と異なり、印を欠く。

(調査員)